三年ぶりのでか山

大迫力

5月3日から5日にかけて青柏祭の曳山行事が3年ぶりに行われ、でか山の姿を一目みようと多くの人が集まり、にぎわった。

「500年以上続く伝統を絶やさないために」という強い思いで開催を決意し、感染リスクを減らすため、運行ルートの短縮や、でか山の曳き手を制限するなど例年と異なるかたちとなった。

4日は、大地主神社に3台のでか山が勢ぞろい。先着の鍛冶町と府中町のでか山が待ち構える中、魚町のでか山は、例年の半分の曳き手のため予定どおり到着できるか心配されたが、若衆の勢いで、予定より1時間も早い到着だった。

5日は、運行ルートの短縮で、3台がそろう場面はなかったものの、でか山を一気に方向転換させる妙技「辻回し」が披露されると、観衆から拍手が巻き起こった。若衆や観衆は「やっぱりでか山はいいね」「最高や」と話し、3年ぶりの祭りに酔いしれた。

こんな時代だからこそ、失ってはいけない「伝統文化の大切さ」を人々の晴れ晴れとした表情が物語っていた。

カタログポケットでこのページを開き、マークをタップすると未掲載写真が閲覧できます。

山町の人々がつむぐ でか山の誇り

山建ての知恵

日本最大級と称される高さ約12メートル、重さ約20トンのでか山。鍛冶町、府中町、魚町では、4月の毎週末に若衆から年長者まで総出で、でか山を組み立てる。

組み立ては、長年の経験を積んだ名人の指導のもと、クレーンを使って、上へ上へと組み上げる。4階建てのビル相当の高さで行う作業は、経験と度胸が必要だ。鍛冶町の山建て主任を務める藤橋和彦さんは「山が好きじゃないと務まらない」と話す。年長者が若衆に指示を出し、若衆は声を掛け合いながら、作業を進める。「山建てを通じて町が一つになっていく。」その言葉通り、でか山づくりで培ったチームワークがでか山の運行の原動力となる。

鍛冶町
藤橋　和彦さん

挺子衆の技

軒先をかすめるように進むでか山の方向を調整するのは、挺子衆の挺子掛けのタイミング。挺子衆は後見役の合図で挺子を掛ける。そのため後見役の役割は重く、長年の経験が必要だ。

魚町の後見役を務める澤越昌宏さんは、的確な指示で挺子衆からの信頼も厚い。今年は、曳き手が例年の半分程の人数で、3年ぶりの運行。予定どおりに到着できるか―。「曳き始めの4日は緊張しかなかった。」と話す澤越さん。それでも、魚町の団結力で予定より一時間も早い到着だった。「皆の動きが良く、順調に進めた。」と安堵の表情を見せた。今年入ってきた若衆に向けて「大変なことも多いけど、山を好きでいてほしい」と目を細めた。

魚町
澤越　昌宏さん

祭りは、
地域の子どもたちを育み、
地域の人々を
つなぐもの。

この町に息づく、
祭りの心は、
次の世代へ受け継がれる。

木遣りの心

でか山の運行に弾みをつける木遣り。木遣り唄には楽譜はなく、各山町で先代から後代へと口伝えで唄い継がれてきた。

府中町の印鑰神社の社務所では、4月上旬から子ども木遣りの稽古が始まる。独特の唄い回しや一つ一つの動作など、手取り足取り教わる。木遣りは、観衆の注目を浴びる花形だ。だからこそ、練習でも厳しい声が飛ぶ。木遣り責任者の藤岡信幸さんは「でか山の上で唄う木遣りは何事にも代え難い。子どもたちには、山を好きになってもらいたい」と指導に熱が入る。「木遣りに完成はない。今年も勉強だ」と自身の木遣りにも厳しい。

府中町
藤岡　信幸さん